

16 Community

NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ

eメール:shichoshacommunity@yahoo.co.jp
 HP:<http://kqcomshky.cocoloq-nifty.com/blog/>
 →:<http://space.aecities.jp/shichoshacommunity/HPshichoshacommunity/nyukai.html>
 ↑年会費 1000円 FAX 059-222-3165 監激コム

『坂の上の雲』放送を考える全国ネットワーク」を結成し「坂の上の雲」についてNHKに共同申し入れを行いました

「坂の上の雲」問題については「開かれ た NHK をめざす全国連絡会」の中で議論してきましたが、この運動の拡がりを見据えて「坂の上の雲」に限定した、時限的な、機動的な全国組織として「『坂の上の雲』放送を考える全国ネットワーク」をつくり広く歴史学者、文化人、メ

ディア関係者、映像文化関係者、個人、団体などに広く呼びかけることになりました。短期間で35名の賛同者を得て2009/11/26 NHKに私たちの考えを申し入れました。(呼びかけ人、賛同団体、賛同者は3ページ) さらに当「視聴者コミュニティ」は独自の質問書を

提出しました。その後渋谷区勤労福祉会館で記者会見を行いました。



(報告する西原一宇氏)

記者会見の模様



初めに、代表4名(松田氏、湯山氏、醍醐氏、西原氏)から、今回の申し入れに至った経緯とその趣旨、問題点について説明しました。

○ 午前中の申し入れに対するNHKの対応(担当部長他)は、「上に伝える」というのみで一切答えがなく不十分であった。視聴者に対する説明責任はどうするのか。

○ 放送を止めろというのではない。原作には事実と違う記述があるので、その点を誤解しないよう措置することを要望する。

○ 京都でのシンポジウムほかの活動報告。事実と反する記述について115項目の質問をしたが中味の無い回答が繰り返された。ドラマ化にあたり脚本家の名前(野沢尚氏)が、つい最近までNHKのホームページに示されてこなかったのは問題。口ケ地も韓国、米国ははずしており後ろめたさがあるのではないのか。

○ 徳島では行政が率先して事実でない内容の番組を賞賛する動きがあり、市長が教育内容を押し付ける指示を出している。教育長が各家庭に

視聴するよう呼びかけている。

○ 視聴者コミュニティの質問状は、原作の多くに歴史認識の誤り、歪んだ解釈があるにも拘らず、NHKにはその認識がない。説明責任があるはずだ。

《記者からの質問》
 ● 原作には誤った認識があることは分かるが、これは小説であるから多少事実と即さなくても、それをあえてあげつらうことは野暮ではないか、たとえば乃木希典の扱いなど。

● 歴史観は個人により違う。あくまで小説だから、書くか書かないかは小説家の意図ではないか?
 ● 批判は、放送されてからではどうなのか?

《全国ネットワーク説明主旨》
 ■ 作家がフィクションを禁じた小説ということには特別な重要性がある。視聴者に与える影響やその利用の仕方により問題が大きくなる。

■ 朝鮮を舞台に戦争をしながらそれを隠して防衛戦争と偽ることは乃木希典の描き方に疑義があると考え、現実には起こったことは1つであり、その事実をどう解釈するかというときに歴史観という言葉がでてくる。私たちは歴史観の前提となる、事実はどうなのかという歴史認識を問題にしている。

■ NHKは一般の新聞、雑誌などと違い、民主主義への貢献をう

たった放送法に従う必要がある。その法律の目的を自覚した対応が必要である。

■ 著作権法により、原作の骨格を変えることはできない。このままでは「祖国防衛戦争」をNHKが喧伝することになり、その影響ははかりしれない。

■ 放送前も、放送後も批判は続けた。 (申し入れ文書)

① 「NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』放送についての共同申し入れ」: (『坂の上の雲』放送を考える全国ネットワーク) (3ページ)
 ② 『『坂の上の雲』の放送開始にあたっての質問～なぜ今、軍国日本を讃美するドラマなのか～』(NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ) (4ページ)

③ 「スペシャルドラマ『坂の上の雲』についての要望書」(NHK問題を考える会 兵庫) <http://kakaue.web.fc2.com/> 「坂の上の雲」放送を考える全国ネットワークはホームページを開設しました。

<http://kakaue.web.fc2.com/> (↓『坂の上の雲』全国ネットワーク結成準備会)



当会名で11月26日にNHKに提出した『坂の上の雲』の放送開始にあたっての質問(4ページ)に対しNHK放送総局「坂の上の雲」プロジェクトエグゼクティブプロデューサー西村与志木氏名での回答が届きました。

(以下回答本文のみ引用)

スペシャルドラマ「坂の上の雲」は司馬遼太郎氏の原作を出来得る限り尊重し、その精神を生かす形で脚色しています。司馬遼太郎氏は小説「坂の上の雲」を戦争賛美の姿勢で書いてはいません。むしろそう誤解されることを恐れていました。スペシャルドラマ「坂の上の雲」は司馬氏のこうした思いを大切にドラマを制作しています。近代国家の第一歩をしるした明治のエネルギーと苦悩をこれまでにないスケールのドラマとして描き、現代の日本人に勇気と示唆を与えられるものになりたいと思います。

3年にわたり放送される全13回をご覧になれば、制作の意図は十分に理解されると思います。

今までの回答が“書面的内容を見ると、私たちが提出した質問事項に対して、何らまともに答えていないばかりか、私たちの質問の趣旨を全く理解していないのではないかと疑いすらもたざるをえず”、再質問しているにもかかわらず、以前の3回の質問[“NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」を考える”市

民シンポジウム実行委員会の2度にわたる質問(2009/7/22, 2009/9/4)および「えひめ教科書裁判を支

える会」/「『坂の上の雲記念館』の問題を考える会」の2009/10/14付け質問]

と全く同じ内容で、ひたすら「司馬遼太郎氏は小説「坂の上の雲」を戦争賛美の姿勢で書いてはいません。」を繰り返すのみです。

私たちが問題にしているのは「『坂の上の雲』の戦争賛美の姿勢」などではなく【日露戦争を「ロシアの侵略に対する祖国防衛戦争」と規定する「坂の上の雲」を「司馬遼太郎氏の原作を出来得る限り尊重し」ドラマ化すればNHKが明らかな歴史的歪曲を喧伝することになる】ということです。

さらに、司馬氏の「『映画化は絶対断ってくれ、テレビも断ってくれ。これは遺言だ』『映像化することは必ず軍国主義を肯定することになる』との司馬「遺言」、また「なぜ今この時期に「坂の上の雲」なのか」に至っては無視、もはや回答することができないと見る他はありませんがNHKをよくするには、ここであきらめずさらに対話を求めていきたいと思います。 ■

各地で「坂の上の雲」を考える会開催

11/8に神戸市でシンポジウム「なぜ、いま『坂の上の雲』かを考える」(主催・NHK問題を考える会・兵庫)が開かれ終了後、参加者は「スペシャルドラマ「坂の上の雲」についての要望書」をNHKに提出しました。約330人の参加者とパネラー、発言者の活発な発言で熱気にも包まれました。

(司馬遼太郎さん原作「坂の上の雲」ドラマ化めぐり論議)

<http://kgcomshky.cocolog-nifty.com/blog/2009/11/118pm100-704b.html>

中塚明氏：

●「坂の上の雲」が明治の栄光を強調する一方で、「朝鮮の植民地化と没落」にまともに触れられていない。

● ①朝鮮は地理的な条件が悪く②無力であり③帝国主義の時代に日本に従属するのは宿命だったから、「朝鮮は自力では変わることができず、植民地は宿命」とし読者にこのイメージを植え付けることにより明治以後に日本が朝鮮におこなった数々の侵略の事実や朝鮮民衆の

反乱から眼をそらせる。次々と作られてきた。

これが「坂の上の雲」のカラクリ。

● 来年は韓国併合100年というこの時に、なぜNHKは朝鮮の民族的自主を認めない作品を映像化するのか。

牧俊太郎氏：

(「司馬遼太郎『坂の上の雲』なぜ映像化を拒んだか」の著者)

● 司馬氏は生前、ミリタリズム(軍国主義)を鼓吹しているように誤解される恐れがあると語り、「坂の上の雲」の映像化を一貫して拒否してきた。なぜ映像化を拒んだのか。「坂の上の雲」が明治国家を賛美し国内の反戦・非戦の動きを描いていない一方、司馬氏自身が晩年に改憲論に批判的な言動をするなど、『坂の上の雲』と乖離(かいり)した心情のゆらぎがあったのではないか。

土橋亨氏：

● 司馬さんの作品はドラマチックだが、あくまでドラマであって、ドキュメンタリーではないということを押さえなくてはならない。ここ10年の改憲の動きと呼応するように、戦争を賛美するような映画が

● NHKが「坂の上の雲」の映像権を得た2001年は、日本軍「慰安婦」問題を扱ったETV番組が、自民党議員の圧力で改変された事件が起きた年。今この時期になぜか。危険で、うさんくささを感じる。

石川康宏氏：

● 「坂の上の雲」で示されている「明治栄光論」は、「東アジアで起きている交流と平和の流れに、逆流を起こす役割を果たす。「中国を中心とした東アジア経済の台頭が著しいなか、地位が低下している財界もアメリカも、金もうけのためにも東アジアと仲良くする方向に向かわざるをえなくなっている。しかし、順風満帆でなくなった『明治栄光論』を仕掛けてくるところに、反動側の役割とあせりがある。

羽柴修氏：「九条の会」

● 来年5月に国民投票法が施行され、いよいよ改憲手続きができる政治情勢となったこの時期に、NHKが『坂の上の雲』を放送する影響は大きい。「坂の上の雲」への批判だけにとどまらずとくに若い人との議論は大きな課題。NHKドラマ



の放映を好機にしていきたい。

11/1日に川崎市でシンポジウム「日露戦争と天皇の軍隊—『坂の上の雲』が語らない真実」(主催・治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟川崎支部)が開かれました。

山田朗・明大教授：

● 明治と昭和を対立させ、明治の延長線上に昭和という時代が出現したという両者の連続性を、司馬氏は

軽視ないし意図的に無視している。
● 司馬氏の歴史観は同時代人の共感を生んだが、太平洋戦争の失敗の夕ネは、近代日本の成功事例の頂点とされる日露戦争で、すでにまきつくされていた。

● 司馬氏が歴史上の人物になりきってセリフを構成しており、読者は本物の歴史書であるかのように見てしまう。さらに、映像化のインパクトは大きい。

11/14日に調布市でNHK「坂の上の雲」放映を契機に..「明治史」を考える日本における「一等国意識」はいかに形成されたか？

岩本努氏：● 「一等国意識」の普及に大きな力を発揮したのはなんともいっても学校教育。教科書はすべての子どもの目にふれる唯一の書物

である。明治十四年から小学校では外国史は教えられなくなった。その理由を喜田貞吉は「我々は二五〇〇余年来引き続いて変わらぬ皇室の臣民である。かかる国体のもとに生まれた我々は非常に幸福な非常に名譽なことである」と、まず頭から叩き込むことが大切で、革命や社会主義などが出てくる他国のことは知らせるべきではないと述べている。

● さらに三大節、ご真影を収めた奉安殿への敬礼などの儀式・儀礼の強制によって、国体意識は体からも叩き込まれた。

調布「憲法ひろば」より

<http://www.geocities.jp/chofu9jou/index.html>



「坂の上の雲」放送を考える 全国ネットワークの共同申し 入れ文書

2009年11月26日

NHK 会長 福地茂雄様

NHK 理事 各位

NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」放送についての共同申し入れ

「坂の上の雲」放送を考える全国ネットワーク

呼びかけ人 (50音順)

井口和起 (京都府立大学名誉教授)

石山久男 (歴史研究者・前・歴史教育者協議会委員長)

岩井忠熊 (歴史研究者・立命館大学名誉教授)

桂敬一 (元東京大学教授・日本ジャーナリスト会議会員)

崔善愛 (ピアニスト)

隅井孝雄 (メディア研究者・京都ノートルダム女子大学客員教授)

醍醐聰 (NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ共同代表・東大教授)

中島晃 (弁護士)

中塚明 (奈良女子大学名誉教授)

松田浩 (メディア研究者・元立命館大学教授)

湯山哲守 (NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ共同代表・元京都大学教員)

賛同団体

えひめ教科書裁判を支える会

坂の上の雲ミュージアムを考える会

NHK 問題大阪連絡会

NHK 問題京都連絡会

NHK 問題を考える会 (兵庫)

NHK を監視・激励する視聴者コミュニティ

賛同者:別紙名簿を参照願います。

(<http://kakaue.web.fc2.com/a6.html#meibo>)

皆様方が日頃より豊かで民主主義の発展に寄与する放送番組の制作にご尽力いただいておりますことに、深い敬意を表します。

さて、NHK は来る 11 月 29 日から 3 年間にわたって、スペシャルドラマ『坂の上の雲』の放送を予定しておりますが、ドラマ化の企画意図を次のように説明しております。

『坂の上の雲』は、国民ひとりひとりが少年のような希望をもって国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて日露戦争を戦った『少年の国・明治』の物語です。そこには、今の日本と同じように新たな価値観の創造に苦闘・奮闘した明治という時代の精神が生き生きと描かれています。この作品に込められたメッセージは、マ化するわけですから、映像表現上

日本がこれから向かうべき道を考える上で大きなヒントを与えてくれるに違いありません。」

私たちはこうした意図のもとに『坂の上の雲』がドラマ化され、多数の視聴者に向けて放送されることに強い危惧を覚え、以下のとおり、申し入れをいたします。

1 ドラマ化にあたって、原作『坂の上の雲』がもつ歴史小説としての重大な歴史認識の誤りをどのように扱うのかについて十分な検討はされているのでしょうか？

小説とはいえ、作者司馬遼太郎氏は「本来からいえば、事実というのは、作家にとってその真実に到着するための刺激剤であるにすぎないのだが、『坂の上の雲』に限ってはそうではなく、事実関係に誤りがあってはどうにもならぬ(文春文庫、新装版『坂の上の雲』第8巻)と述べています。そして新聞連載に吟味を加えた上で「全集」に収録されたその後も「重大な誤り」について「月報」に訂正文を掲載しています。つまり、『坂の上の雲』は単に日清・日露戦争とそこに登場した人物を題材にしたというだけでなく、全編を通して歴史の事実によって編まれた小説です。しかも、NHK は原作の著作権継承者の許諾を得て原作をドラ

の脚色はありえても著作権法上の定めには照らし、原作の骨格をなす歴史認識を改変することはできないという制約を受けています。

ところが、その原作を貫く歴史観には次のような重大な誤りが含まれています。たとえば、司馬氏は「日露戦争はロシアからは侵略戦争、日本からは祖国防衛戦争であった」と記していますが、ここには根本的な歴史的事実の誤認があります。当時、ロシアが日本を侵略しようとしていたことを示す歴史的事実はありません。ロシアに侵略される現実的な脅威もないのにロシアと戦うことが「祖国防衛戦争」とどうして言えるのでしょうか。朝鮮半島がロシアなどの大国の勢力下におかれると日本の主権が脅威にさらされるというのは、明治の為政者たちが軍備拡大のために意図的に唱えた対外政略論に

過ぎません。さらに、開戦前のロシアには、朝鮮半島制圧の企図もありませんでした。これらの事実は、戦後の歴史研究で多くは明らかにされていましたが、とりわけ最近の根本資料に基づいた研究でいっそう詳しく実証されています。かえって、日清戦争と日本の朝鮮王宮占領、「東学党の乱」の武力制圧、朝鮮王妃の殺害などを経て、日露戦争での朝鮮占領、そして「韓国併合」、さらに「満州」占領へと政策展開していったという近代日本の歩みこそが歴史的事実であることが明らかにされています。つまり、原作者・司馬氏の「極東情勢」認識や朝鮮半島制圧についての認識には、明らかに誤りがあります。

NHK は「ドラマ化」にあたって、これらの明らかに事実に反する記述については十分な検討を加え、必要

とあれば著作権に一定の配慮を払った上で「訂正または補足」の措置を講じる必要があります。また「原作」にあくまで忠実に放送するというのなら、視聴者に「事実との違い」を何らかの形できちんと伝える責任があります。それが困難であれば、『坂の上の雲』が放送される期間に別途、日清・日露戦争の経緯を検証する番組の放送を企画するよう要望します。

2 司馬氏は生前、数々の映画、テレビドラマへの「映像化」要請を拒み続けたといわれます。1986年NHK教育テレビでもその趣旨の発言を自らしています。そのこの持つ意味は重いものがあると私たちは考えます。

✓ (中塚明氏→)



氏が映像化を拒み続けた理由は、この原作そのものに加え、映像にした場合の「戦争」場面の多さが、過去の戦争の反省の上に実を結んだ憲法第九条の精神や人々の非戦の誓いに逆行すると考えたからではないでしょうか。氏は1945年以降の「戦後」を高く評価し、「私は戦後日本が好きである。ひょっとすると、これを守らねばならぬというなら死んでもいいと思っているほどに好きである」(『歴史の中の日本』)と述べています。NHKは、こうした司馬氏の思いを深く尊重すべきではないでしょうか。

憲法9条を「改正」して「普通の国」にしようとする動きが強まっている今日の状況のもとで、司馬氏が「迂闊に映像に翻訳すると、ミリタリズムを鼓吹しているように誤解されたりするおそれがあります」と懸念したことの意味が、今あらためて大きく現実感を帯びてきているように思われてなりません

私たちはドラマ化にあたって、番組制作者の表現の自由、編集の自由を尊重し、それに配慮する必要性は十分認識しています。しかし、来年「韓国併合」100周年を迎えるこの時期に、またNHKが過日放送した

「JAPAN デビュー」で取り上げた戦前日本の台湾統治の認識をめぐって内外で論議が起こっている最中に「なぜ今『坂の上の雲』なのか」、「原作に含まれる歴史認識の重大な歪み、誤りをドラマ化にあたってどのように扱うのか」について、莫大な番組制作費を負担する視聴者が求める説明を「表現の自由」、「編集の自由」で遮ることはできないと考えます。私たちは放送開始後も引き続き貴局のドラマ制作姿勢を注意深く検証し、事実に即して批判と提言を行っていくことを最後に申し添えます。

以上 ■

NHKを監視・激励する視聴者コミュニティの質問状

NHK 会長 福地茂雄様
NHK 理事・放送総局長 日向英実様
NHK エグゼクティブ・ディレクター 西村与志木様

2009年11月26日

『坂の上の雲』の放送開始にあたっての質問

～なぜ今、軍国日本を讃美するドラマなのか～

NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ

共同代表湯山哲守・醍醐聰
皆様におかれましては日頃よりNHKの放送番組の充実にご尽力いただき、厚く御礼申し上げます。さて、NHKは来る11月29日から3年間にわたって、スペシャルドラマ『坂の上の雲』の放送を予定し、目下、大々的なキャンペーンを行っています。その際、NHKは、ドラマ化の企画意図を次のように説明しています。

「『坂の上の雲』は、国民ひとりひとりが少年のような希望をもって国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて日露戦争を戦った『少年の国・

明治』の物語です。そこには、今の日本と同じように新たな価値観の創造に苦悩・奮闘した明治という時代の精神が生き生きと描かれています。この作品に込められたメッセージは、日本がこれから向かうべき道を考える上で大きなヒントを与えてくれるに違いありません。」

そうでしょうか？ 私たちは『坂の上の雲』をこのように読み取ってドラマ化することに強い危惧を感じ、以下のような質問を提出します。これについて、一括ではなく、項目ごとにそれぞれの趣旨にかみ合うようなご回答を12月9日までに別記

宛に文書でくださるよう、お願いいたします。

1 原作者の遺志をどう受け取るのか？

『坂の上の雲』の原作者・司馬遼太郎氏は生前、多くの映画会社やテレビ局から原作の映画化、ドラマ化の申し出を受けた際、原作を映像化することによってミリタリズムが鼓舞されることを恐れ、申し出をすべて断ったことは皆様もご承知のとおりです。そうであれば、貴局がなおも原作をドラマ化され放送されるに至った理由を明快に説明される必要があります。

これについて、ドラマの制作を担当された西村与志木氏は、「東西冷戦の対立は過去のものになったことから司馬さんの危惧は解消できると思った」と述べています（西村与志木「映

像界の志を引き継ぐ、アンカーとしての誇りと責任」、『NHKスペシャルドラマ・ガイド 坂の上の雲 第一部』日本放送出版協会刊、2009年、169ページ）

本当に解消できるのでしょうか？
【質問 1-1】 東西冷戦の対立は過去のものになったと認識することで、原作を映像化することによってミリタリズムが鼓舞されることを恐れた司馬氏の危惧がなぜ解消されるのか、その理由〔因果関係〕はまったく不明です。わかりやすくご説明ください。

【質問 1-2】 司馬氏の遺志を顧みるのであれば、晩年、氏の朝鮮観に揺らぎがあったことに注目する必要があります。彼は亡くなる7年前、ソウルの青瓦台で盧泰愚大統領と対談した折に、「私なども、李氏朝鮮が

日本の悪しき侵略に遭う（1910年）まで朝鮮といえば朱子学の一枚岩で、そこには開化思想や実学（産業を重んじ、物事を合理的に考える学派）などはなかったと思っていた。いまは、だれもそうは思っていない。」（『文藝春秋』1989年8月号、93ページ）と語っています。これは、日清戦争を日本による侵略戦争ではなく祖国防衛戦争であると捉え、朝鮮を「どうにもならない」国で、「韓国自身の意思と能力でみずからの運命をきりひらく能力は皆無とってよかった」（第2分冊、50ページ）などと記した原作の見方とは食い違っています。

司馬氏の遺志を尊重するのであれば、晩年の司馬氏のこうした朝鮮観の揺らぎを考慮する必要があると考えますが、いかがですか？

2 なぜ今、『坂の上の雲』なのか？

【質問 2-1】 アジアの近隣諸国との友好・平和関係の確立が大きな課題になっている今日の時代状況とのかかわりでいいますと、原作が日清・日露戦争を日本による侵略戦争ではなく、祖国防衛戦争とみなしている点を黙過することはできません。原作はまた、日本国内の内乱制圧の「同士討ちで同胞が大金をかけて殺しあうくらいなら、海をこえて朝鮮を討った方がよい」という小村寿太郎の言葉を肯定しています（文春文庫、新装版、第2分冊、34ページ）。さらに、原作は1894（明治27）年に日本が朝鮮への出兵を閣議決定したことを「単に出兵であり、戦争を起こすということではない」（同56ページ）と記し、清との勢力均衡を維持し、国家の名誉を保全するためであるとした閣議決定をそっくり肯定しています。こうした記述を含む『坂の上の雲』を、2010年に韓国併合百年を迎える今、NHKが総力を挙げて長編ドラマ化することが、アジアの中の「日本がこれから向かうべき道を考える上で」どのようなヒントになるのか、ご説明ください。

【質問 2-2】 また、アジアの近隣諸国との友好・平和関係の確立が大きな課題になっている今日の時代状況

とのかかわりでいうなら、「戦争という、このきわめて思想的な課題を、わざわざ純軍事的にみるとして、日露戦争というのは日本にとってやるべからざる戦争であった。あまりにも冒険的要素がよく、勝ち目がきわめてすくない、という意味においてである」（第8分冊所収、あとがき2、314ページ）と記し、「古今東西のどの戦争の例をみても、日露戦争の日本ほどうまくやった国はないし、むしろ比較を絶してすぐれていたのではないと思われる」（第8分冊所収、あとがき2、320ページ）と言ってはばからない原作を今、NHKが総力を挙げて長編ドラマ化することが、アジアの中の「日本がこれから向かうべき道を考える上で」どのようなヒントになるのか、ご説明ください。

【質問 2-3】 以上指摘したように、『坂の上の雲』は日清・日露戦争を、その後日本が起こした満州事変・第2次世界大戦と続く戦争とは区別して、侵略戦争ではなく「愛国的栄光の表現」（第2分冊、53ページ）、「祖国防衛戦争」（第8分冊所収、あとがき5、344ページ）とみなして



います。NHKは原作をドラマ化するにあたって、原作のこうした歴史認識をどのように評価し、扱われるのか、ご説明ください。

3 『坂の上の雲』は現代の日本人にどのような勇気と示唆を与えるのか？

NHKは『坂の上の雲』を、主人公たちが「少年のような希望をもって国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて日露戦争を戦った『少年の国・明治』の物語」と評価した上で、「現代の日本人に勇気と示唆を与えるものにしたい」とドラマ化の意図を記しています。はたして、『坂の上の雲』をそのように読みとることができるのでしょうか？ 私たちは原作からどのような生きる勇気を得ることができるのでしょうか？

【質問 3-1】 『坂の上の雲』は日清・日露戦争を題材にした歴史小説ですが、その内容は交戦当事国、特に両戦争を指揮した日本の陸海軍及び政府の戦争戦略・作戦の巧拙を実況中継さながらに描いた小説です。そこには日本軍の戦闘を指揮した職業軍人の人物評や日本の命運を左右した作戦の巧拙に関する記述はあっても、日本軍によって追い詰められ、殺傷された朝鮮、中国の市民がなめた苦難、不幸の描写は全くと言ってよいほどありません。

NHKは『坂の上の雲』をドラマ化するにあたって、こうした原作の際だったナショナリズム、排外主義的傾向をどのように評価し扱われるのか、ご説明ください。

〔質問3-2〕 他方、原作における日本軍の側の記述はどうでしょうか？そこでは、前線に配備される兵士を将棋の対局にたとえて「持ち駒」（第4分冊、310ページ）とみなし、国内に待機させられた予備隊を前線に送ることを「戦場は新鮮な血を欲していた」（第4分冊、312ページ）からだと記されています。

もっとも、たとえば、原作のなかで旅順総攻撃を描いた箇所では、「作戦当初からの死傷すでに2万数千人という驚異的な数字にのぼっている」（第4分冊、308ページ）という記述があります。しかし、原作はこれを「戦争」ではなく「災害」とみなしています。旅順総攻撃を指揮した乃木希典少将と

伊地知幸助中佐の無能力に帰すべき災害だということです。

NHKは『坂の上の雲』をドラマ化するにあたって、「国運」を掲げた侵略戦争の非人道的な実態に目を向けず、戦争の災禍の責任を特定の指揮官なり個々の作戦の巧拙に解消した原作をどのように評価し、扱われるのか、ご説明ください。

〔質問3-3〕

上記の〔質問3-1〕、〔質問3-2〕で紹介したような原作の好戦的記述をみてもなお、NHKは『坂の上の雲』の主人公たちが「少年のような希望をもって国の近代化に取り組んだ軌跡を描いた小説と評価されるのかどうか、お聞かせください。

また、主人公のひとり秋山真之が「軍艦の分類でいえば砲艦に近く、とうてい大海戦の主役たりえない」「筑紫などという小さなふねにのっているようなことでは、主決戦場にはのぞめないで

あろう」（第2分冊、66～67ページ）と思い、大艦に乗って主決戦場にのぞむことを念願した彼の志が現代の日本人にどのような「勇気と示唆」を与えると皆様はお考えか、お聞かせください。また、ドラマではこうした秋山真之の志をどのように扱われるのか、ご説明ください。

私たちは陸・海軍で侵略戦争を陣頭指揮した『坂の上の雲』の主人公たちの生きざまを「少年のような希望をもって国の近代化に取り組んだ行動と評するのは侵略戦争の残虐な現実を覆い隠し、侵略戦争の先兵の役割を担った彼らの行動を美化する危険極まりない評価だと考えています。むしろ、私たちは『坂の上の雲』の主人公たちの志、生きざまは不条理な国家の意思に従うことがいかに自他を不幸に陥れるかを悟らせる警鐘の意味を持つと考えています。



「映像化は絶対断ってくれ。これは遺言だ」みどり夫人の99年の発言とNHKのドラマ化強行 投稿 tarokanja

『司馬遼太郎——伊予の足跡』（アトラス出版）という一書を読む機会を得た。1999年5月1日付で発行されたものである。そのなかに「福田みどりさん特別インタビュー」が掲載されている。みどり氏は、故遼太郎氏の夫人である。

私が注目したのは、「いま松山では『坂の上の雲記念館』をつくる計画が持ち上がっていますが、それについてはどのようにお考えですか？」というインタビューの質問に答えて次のようにこたえている下りである。

本人は「坂の上の雲」が軍国主義と間違われることだけは何より嫌だから、「映像化は絶対断ってくれ。これは遺言だ」といつも言っていました。だから、これだけは守らなければと私は思っているんですけどね。

司馬氏自身、1986年、NHKの番組で、「映画とかテレビとか、そういう視覚的なものに翻訳されたくない作品でもあります。うかつに翻訳するとミリタリズムを鼓吹しているように誤解される恐れがありますからね」と発言。これは、活字化され、1998年『昭和という国家』（NHK出版）という表題で刊行されている。司馬氏は、他のメディアでも同様の発言をし、それを取り消すことなく、終生拒否を貫いたのである。

みどり氏のインタビューは、その翌年のことであり、それは司馬氏の決意の固さを裏付けるものである。

ところで、99年と言えば、司馬氏逝去から3年目であり、NHKが遺族の説得を始めた年でもある。この時点でのみどり氏の立場・心情が確認できる。そして02年秋には、「承諾」された。インタビューの質問に出てくる「坂の上の雲記念館」の建設許可も同時に出され、03年3月にドラマ企画が発表された。

03年、ドラマ化発表に当たって出されたNHKの「企画意図」という文章では、司馬氏とその遺族が映像化に反対していたことも、理由も、どのような経過でOKがでたのかも一切書かれていない。ドラマ放映開始を境に刊行された出版物や新聞・雑誌などで、NHK関係者や司馬記念館関係者がようやくそのことを語り始めた。それは次のようなものである。

東西冷戦の対立構造は過去のものになり、また映像の技術レベルは圧倒的に進化していることから、司馬さんの危惧は解消できると思いましたが、何よりもこの時代だからこそ、『坂の上の雲』という小説を「活字離れ」といわれる若い人たちに読んでほしい、と思ったからです。（西村与志木・NHKエグゼクティブ・プロデューサー／『スペシャルドラマ・ガイド』第1部）

ずいぶん長きにわたってNHKの皆さんや財団の関係者の方々と話しをしました。その過程で思ったのは、『坂の上の雲』が執筆された当時と比べて映像文化というものがずいぶん成熟したと思えました。それに技術も表現力もかつてより進歩しています。またいまならかうじて、第二次世界大戦の悲惨さを直接もしくは間接に知っている

最後の世代が、NHKスタッフにも残っているということでした。（上村洋行司馬記念館館長／『プレジデント』12・14号）

いずれも作品の内容にある危惧の根に触れていない。多くの歴史研究者が指摘しているように、朝鮮理解、戦争のとらえ方、明治国家の見方など、内容にこそ問題があるのである。この弁明とも受け取れる文章は、技術論に矮小化している。映像技術の進化は事実だが、それゆえに危惧が増すという見方もできる。「東西冷戦の対立構造」崩壊は司馬氏存命中の90年代初めことである。司馬氏の死去は96年である。遺族への説得開始はその3年後である。

これで司馬氏の危惧した「ミリタリズム」云々にこたえているだろうか。視聴者の疑問にこたえているだろうか。あとは読者の判断にまとう。

日中、日韓の歴史共同研究、東アジアの平和・友好の構想などが始まり強まろうとしているなかで、NHKがいまなぜこの問題作をドラマ化するのか一放映期間中も、厳しく問い続けられることになろう。とくに来年は韓国併合100周年の年である。その年にドラマは「日露開戦」を迎える

もくじ

- 1頁 「『坂の上の雲』放送を考える全国ネットワーク」共同申し入れ
- 2頁 NHKからの回答について、各地で「坂の上の雲」を考える会
- 3頁 「坂の上の雲」放送を考える全国ネットワーク申し入れ文書
- 4,5頁 NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ質問書
- 6頁 Column 映像化は絶対断ってくれ。これは遺言だ